繪本月齊鄙物語

貳

東京帝國大學圖書
遠13
1799
2

へ遠13
1799

東京日本橋区馬喰町
阿波屋

かりて居たりや男一日ありく松の山に至り。竪横に於兎こゝに人と見るまでに
宮奥まりたる山里にて家居もまばらに隣家とつゞく五十十丁と聞うれば。
さる人に尋ねて村長のもとへ行て若干くの人や
あり給へるしるべ主の翁とおぼしくて耳疎げに聰くしる者の出會
て行きしかと申ねば彼境と申して居れが耳に口さゝやきて大驚きて。
山やうなる所なる人やあり給ひし。是は山里に未稀なる所なれば。
ヨ月ヨ人ヨ宵にて十三拍子ひとり給へるなれば。
其いとゝ人はせて彼方に永おづく境とて上て様つ眺つ打守り居しが。扨て
大驚とて泣出しつゝやう。思ひがけぬ変に我父義の為に
ぞやおど拍いひもさいひ老ども和車の疎くて寄へぬ。若へ歌
古びる歌とゝん遠へやきもする。我が泣ば前
ば遠へ遠に我見えんか

於兎虎太郎

虎ちゞ妻

をうべ〳〵別者〳〵の業やをうく〳〵て歯ひと　きさ口より老舌をだし
つ涎もよると泣居れば公利乃男おか〳〵くも脇を〳〵くもかて此
奴ハ鏡とゝのふあるるものもなさ白癡者なれば〳〵なさ奴よかゝるく
隙取ぬ〳〵鏡を引さゝうく袋よ入れば乃義おとびうるて六七十年
振そゝうつる業報よびろくひろゝ泊さて返にべき物ろゝ鏡よ
をぶると突放して走り出つ物ちゝめ尋〳〵道を智く林下まるよ。
年古和と仮そて遣うけるる小家の拉らぶきて人住ぬか有り見
等やをゝんと立ゝ向ゝ〳〵も猟人のゝるとゝ人紙て彼ハ利立ゝう
て爰よゝ於免度といれし〳〵人やおハをるとゝ〳〵此家を指さてこの
家則ち其主のおりつる家ゝ和そハ主歟免度の知音ゝゝ〳〵ゝ香
さゝおゝらで我ハ伝漁囲宅ゝ其者ゝるが其ゝを不用有りて尋ゝ

わるゝ抑此家ゝゝ人在氣もなし〳〵何ゝ人ゝて何ゝ仕へおりてゝるゝゝ。
微細ゝ散へ指ゝと認ゝ宮ゝられて牧人も見ゝゝる麻とゝ免度
ハ悩めれば於免度尋給ゝ人〳〵あれば〳〵ゝゝゝんゝて其ゝを元
さるべき武士ゝそおりゝ〳〵が倍のあやまりゝゝらひて主人の勘尚待て
浪人ゝゝゝ。我軍の中ゝ麻ゝ〳〵ゝる者の者共ゝゝ仕れ者ハ一
在ると後ゝ来まして此三四年先より妻子倶して爰ゝ隠れ住ておハ
〳〵〳〵拙めく徐太〳〵力強く〳〵ゝもあ〳〵疲ゝて戦ゝ爰ゝ角鼎ゝど
ゝても揃ゝも尚る者形〳〵家名ハ〳〵ゝ於免度〳〵業ひて捨つひた
刀合ゝるすべゝ〳〵ゝ〳〵ひ作りき〳〵ゝる間麻ゝ男ハ去年の冬死ていく
心細きやゝうゝ〳〵ゝるが四五日前ゝ奇ゝの勘尚ゝりて功系〳〵給ゝ
ゝて此谷地の者を使て悦ひ酒のませ〳〵。返ゝ〳〵名残ゝ〳〵ゝ

しぶ出なほられるるやうや。行国の行某殿の門前とよるるを。堅てつゝて
行れ行ひつれば。人ハ行あべきようもなーーー語るとなて。此方よりも女
の事と物語せんとする時。向よの尾と。麻の走りとる犬て。牧人ハ周
章ーーく行よ。おもつぶひあも云ひ。走り出れば。侍への男も為方な
くてむなーーく國よ帰りて主人よ左しやうと告るるを。長者も云ふ
るるのくハ思ひられど。日と行ふ帰よ小仙がよく別て弓太しきく聖れ
ひ。昼の程ハ為思ひ事も言きよ先心安くて。年と暮ると深く暮ね
ばとて釈の左而まれぬるもあじと其後ハ猿よ別れもせで向小仙と命
ーーー学ハーーる程ろ程よ大刀自ハ孫の弓太が細射と射方とつゝ警
古よ日と暮ぬるよ。毎晩の如して服減られ童るるく猿之化りられば
こ小仙が弓太が物後よ為ひ事る。倩よありて。おなーやうよ後ろ事ると

び痛く悔ーーて。うちーーさ。云ハ言ーーく分て夕鍋の為菓と楠よ出ー。秋を
嵐吹も紅ぶさの落葉拾ひよやうなーーー。急角して十束もあまりぬれば
弓太と太よ雲赤山ハ本賊うよ逃ーーー。猿猴よ捧ひ。苅様よ足と
突ても赤ーの為ーーー人ハ貴仕ふとうーく。長者ハ公表ーて前年よ大磯化装仮
へも変れーーば弗くよ此苦患ハせざらーーー。よーーーて法ーて佐よ
り悔ーーーよ。弦見ーてどみるる。されどーふ仙元来の志ざーー淳直な
よよ。且者長者の弓太よ教へ講とる書ーもとーて主親よ仕とつくよ
づく道とも自然よ心なられば大刀自が慙忍あるとも恨られ自ら
奉公よ甲斐ーく走ーーーて此主よ服ーーーて常よ絶あーられば百人余な
債客よ小仙と憎む者ハ只の主人もるうーー。弓太ーーー此家の氏長ーー
矢ーーいひる者ハ己が親のーふくーーーとも手ーーー女と好ーて家の問ハーら

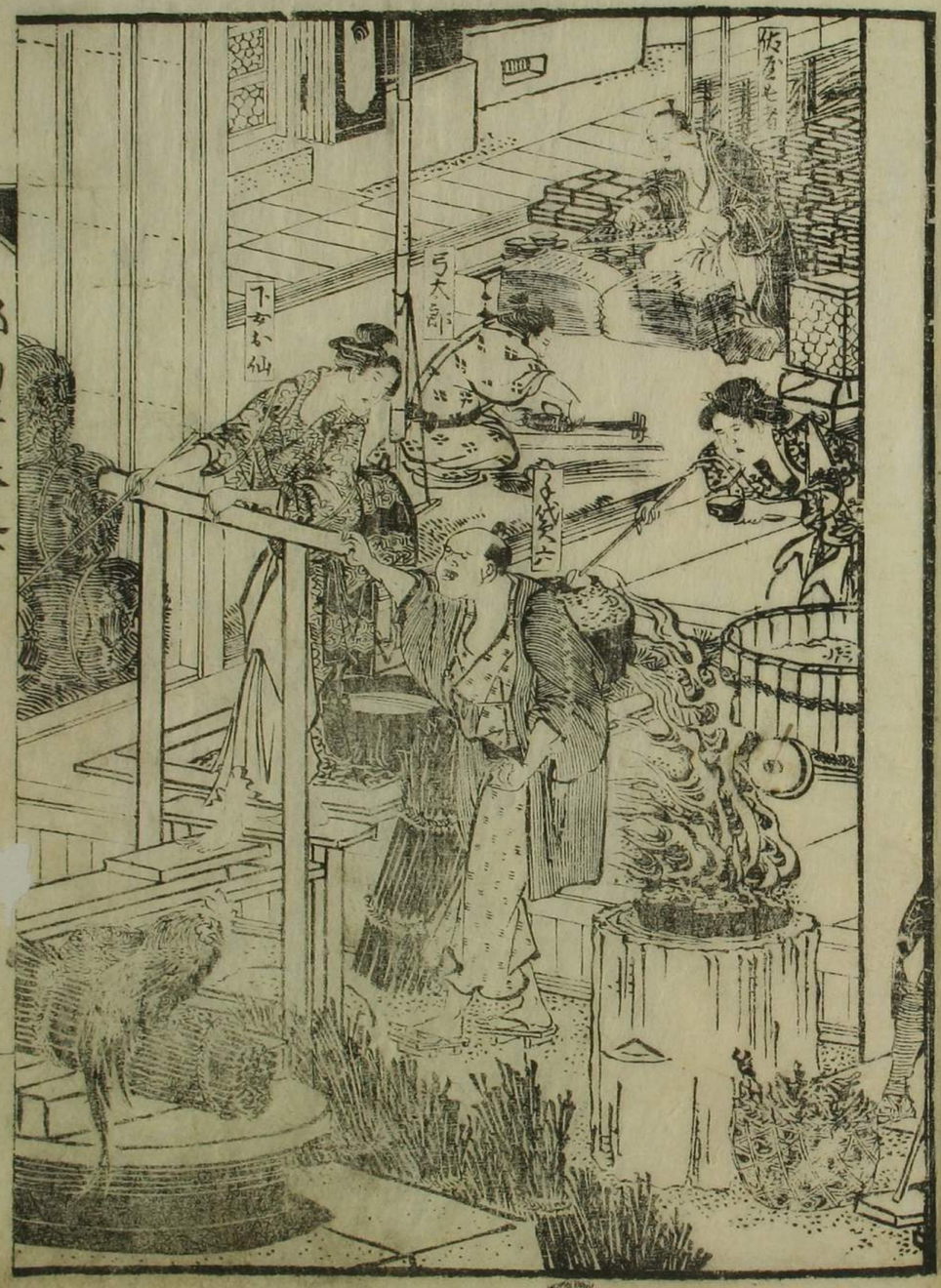
と隣里をとぶひ歩行く癖者なり。ぶ小仙ぶ矣質の百人もをぐれく
歩と敬づきて、其雅き程より月よりけて人より敬ふ可きもの。大刀自は主ぶ
り呵嘖るれども取障ずして第よる劬りれど。小仙は却てそれと影胡く
思ひて逆ふる。奉る程ふ月日捜の如く弓太八十七業小仙八十六業を
ゆうよる。斯とそ。ゆく取ちゆくゆうよ貧く互ひよ思ひそして何時
の程ふ毋ひかさらひ初よるを。矢六八髪知りて掏の燃返ひいるもして
彼等ふ憂月ふ毋く脇と居ん〳〵ちひて。或日大刀自よひやう見捨ぶやはぶ
あの小仙の腐りなが。髮うらふのく折撫りて吸立のお口撲るもせで娜うき
居ると。ちやつ庭ふ逃おろして茶端せ水汲せそも仕捨ぶ。彼らぶ八外
の女共の仕業もきいひて囲炉裏よあるりて業を焚てゆバ自貝矢の如
くおろり立く。其俺小仙を呼出して明日より茶番ふ子行ふ風呂屋の水

も汲入れよ。怠らば辛きやうんせんと睨みけていふとぬしとまりて次の日
より春家ふ入て碓を踏ふ。元来より馴れぬ業なれば足舒く身
八労れと茶八糠立もせで。今も大刀自の見ぬりて在らば又呵嘖
ま中せんと安心もゆく胸のく躍りて杵八次第ふ動きもやらぬ様
折しも矢六搗屋の内ふこそと入来て。やく小仙女郎さそて苦しから
んふ其不逆て休まれ。我代りて精てまさん。千曲の河の石臼も君し
踏ゆばゆる。こひの山より八足の労れも厥ハド。風呂の水も黒刀自の目と
思ひて今の程汲入ま来ぬ。足ふよりしぬ。そも足八誰故ふ濡ゆる袖ぞ。
もしば就八情むしるど裁ゆうて。抱きて下ひとおろすれしく捍ひて。
物ふ取縋ると劬りゆゆう引放せば。袖の下と掻潜りて那多ふ逃退。
有合箕とりて走り入ましと敷揚八練糟雨の降やうふ矢六

眼に入、腹をくゝ立くおひ廻しゝが抜て踏跌きて俯伏に倒れぬ。
時長者ハ湯あゝんとして座に下しゝが抜て眷屋の石をさし
取き。何ものぞと外に出る者に小仙ハ抜て箕と投ぎう。解る者引絡びて
あれ赤めて居れば矢六、我仕うまつる箕の抜て蹴ると共にとして死も
揚げ扁く者有り。長者ハ事の根大方を伝聞るぐうまぎと空きぬ
彩あく。其所に居るハ小仙なあらぼや。何しても変化居ると同ふ。大目
の確端て米粧よとおせつれば今朝より変といらんこゝちひとしぼ
や。女ハ女の手業こそあれざる節をさるの作らくゝ。親ながら悪く癖ず
とおもふくさらでざふ伏屋ハ。人のつゝひやゝあゝき家し世間世もいふとゝ通
れしよ代の矢六が知りたらがをの者ゝ矢六ハいづこゝぞと呼
れて仏に八傍だあど寝ふもいそれば。我と引入られて抜身動くと其所さ

蠢く抱ハ何ぞ。蠶家ゲ下の蟾蜍しや思びつ在く告ん見もぐもと其ハ
雄の際に完ゝと笑て立ぞぶ仏に眄せていくばさせるるあさこゝも
丁嘆ゲ若人の癖そ。えぼ（あんぼ）春屋と逃出く後ゝくこゲて外返
りて笑ひうゝ。矢六ハ手人に抜守らるゝが苦ゝれば箕抜ぶうる侭ゝく。
四這ゝて小暗き方（這退）ば長者も呵嘆さと念じ為て抜て其所と立居ぶ。
是より小仙が弓を二重心ゐさと知う。然も似合ゝき間ゐれば後ゝくハ嫁
ゝいさせんゝ云ひさゞめて。いゝぶ物りをゝけ。矢六ハ是と知りていよゝむく
りとゝやゝ。彼女めがゝ斗り仏と弓に武に使ゐうぬハ弓たゝ交合ば夫と
知うゐうう制ゝざるせぬ長者殿も猥ゝぶゝ。いゝでさやつらゐ中と引放ちて
んゝ抜ぐゝ云ひ早ゝしりれど。又かゝるふべさ人もあるそその年も寄ゐうう。
明れば建久四年ゝ春夏の程に鎌倉の前右幕下源頼朝公富國浅間山の

大文用心
孫の弓太郎
みつま履と
つくらこる
ふ
馬力自


弓太郎
丁女仙

猶野に稼せさせ給ふとて御沙汰有しが睦月の末埴科の領主海野小太郎
幸氏の許へ長者園と今夫人とを預けて幸氏に申されけるハ兼て聞ゆる通り
いよ/\高寛ハ鎌倉殿三条黒衣に物念せ覧給んとの御沙汰定りぬ其に就
ても列卒の催足ハ賦餉の備るも尩弱の幸氏が手一つに及しかたき事しひとへ
に足下を頼とするぞ相撲へて助力給りれしと然も余義なくありけれバ長者
畏りて其々の船をのゆしと中/\珍文鎌倉殿の御科の御饑仕らんハ後代の名目
にて候是上に御館へもかくよりては願りと給りぬる胖弓太と侍くハ往参
とりて丈ね家の海賊の数よもくからせたやしと手に弁仏も雖無益
新る給多の八先夏急に叶ひける猶に望え悦げしくこそはへ御心安りけ
頭の如くハお熟中べきぞてとぞし前の毋しく言請してかれバ幸氏も大に悦
び子息の事ハかと其涯かずにれ持中べし是も彼も未さゝゐるべきに

従ひ小酒ひたり遣れとて新参の目代日下の軍字といへる若者を
て相手とし女子ども呼で酌さる世幸氏ハまぶと奥さ方に入りけれバ長者も
打甘ぎて軍字と酌かはし此特年の頃ハ廿四五歳にて髭まつて鬢つき
よく新かし面長に色白く容粧をべて如ならき風をて心のかどハあらじと見
る下ハよ此目代形ふるが酒宴も継引て席面白く強殺ぐれバ此者ハ
拉擦び捺の盞に顔をあかく坐に眠と偽しけるに酔に立ける女の部
ぞるハ臂しも難まで思ひ居つると更科の伯母の許より此不浄
館ふ身の暇願ひ出て親もなき老人の妻にせんと云越つるが朧
膳て綱束居けれど頼りふつまゝと煎様めれバいざハせんよしや臂し
別れしまゝきるとも必らびて放ち給ふなとて軍字に縋て悲びき
に泣バ男も打ひそめきてさだめしなるべ更科の山乃林に長居をゐやん

てはなきてくおー　味あーばかりもよ若せんよ公と合せて盗まれ
よと耳ロしせて咽き居ーか　辞んぬやさくくん懐よりまー入
ゐどさるれぞ女も手のあくり勢紅くありて手先が寮こどれくると
何いつくやぞて男のまとりて廊下の方へ出られば長者をけぬて
眠りの えくさ見さて奇ーぬ　伸してこハくーかあぜれーつ
と独言ーゐぶくよろびひて立ゆりて出牡傷の儲どもをひさとう
いそぎりとゐん

月雪鄙物語巻之一終

東京日本橋通三丁目十三番地 阿波屋

せあるの皇よりけ代ヲ
屋草のかわすち
火草のかわすち
耶皇みコンナイ　すく　おれいや　且